

調査報告

パブリック・アーケオロジーの実践に向けて

—香川県小豆郡土庄町豊島を事例として—

五十嵐 聡江・小野 寿美子

I. はじめに

近年、考古学と現代社会との関係を考察するパブリック・アーケオロジーが日本で紹介されるようになり（佐藤編 2005）、遺跡の公開や整備、遺物の展示といった「考古資料の活用」にパブリック・アーケオロジーの概念を導入する事例も出てきている（真邊ほか 2008）。

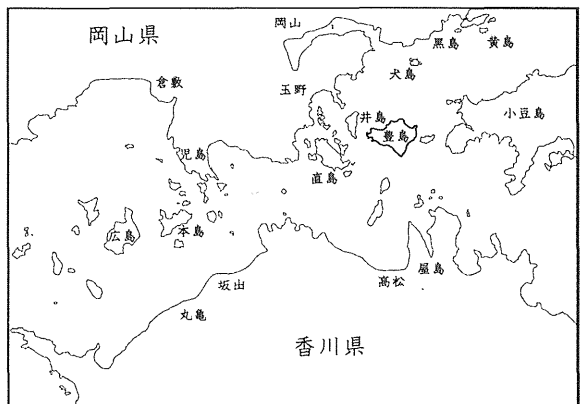
1970年代に米英で成立したパブリック・アーケオロジーには、「市民のために」と「市民と共に」という両方の意識が必要であるとされる（松田 2005）。これまで博物館等で行われてきた教育普及活動は、「市民のために」という意識が強かったことは否めない。今後は「市民と共に」という意識を備えつつ、教育普及活動をしていく時期にきているのではないだろうか。

そこで、私たち考古学チーム¹⁾は「市民と共に」という意識を持ちながら、パブリック・アーケオロジーの実践に向けて香川県小豆郡土庄町豊島^{てしま}で活動を始めた。

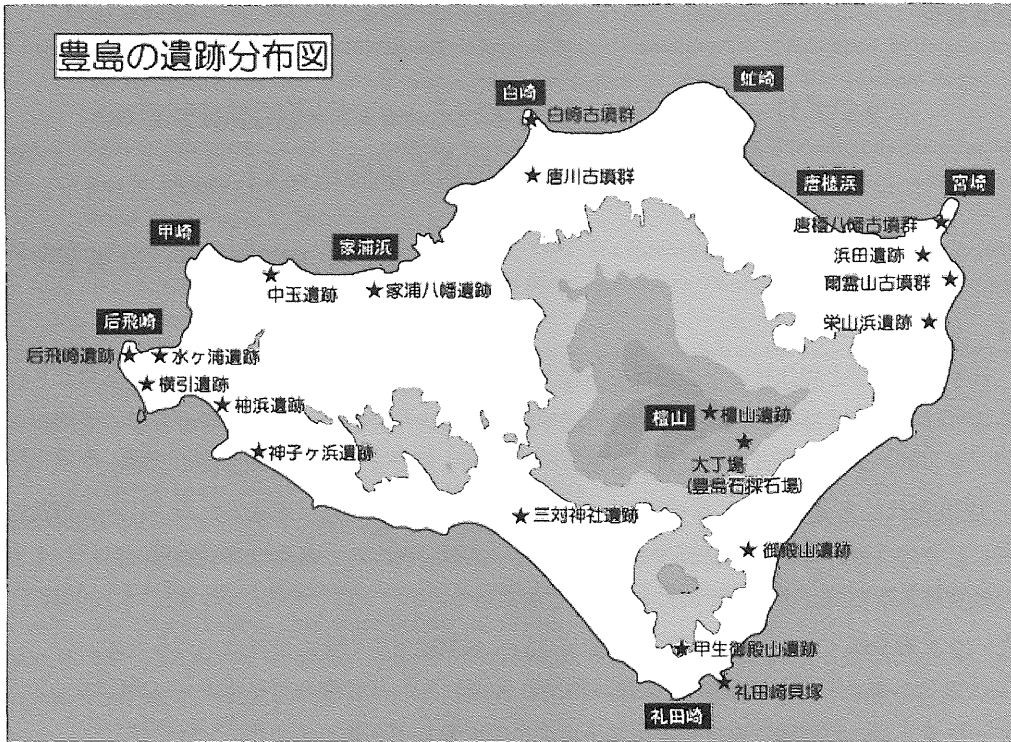
豊島は、瀬戸内海東部の小豆島の西方約4km、高松市の北方約10kmに位置する（第1図）。島の外周は約18km、中央には標高340mの壇山がそびえ、海岸沿いと丘陵地に6集落が点在している。島の人口は491世帯、1042人（平成20年10月1日現在）、65歳以上の割合を示す高齢化率（高齢化指数）は約42%であり、人口の5人中2人が高齢者の島である。

豊島は、昭和9年には日本初の国立公園の一つである瀬戸内海国立公園の一部として指定され、温暖な気候を利用した農業・漁業も盛んであるなど、島の名の通り自然豊かな島である。

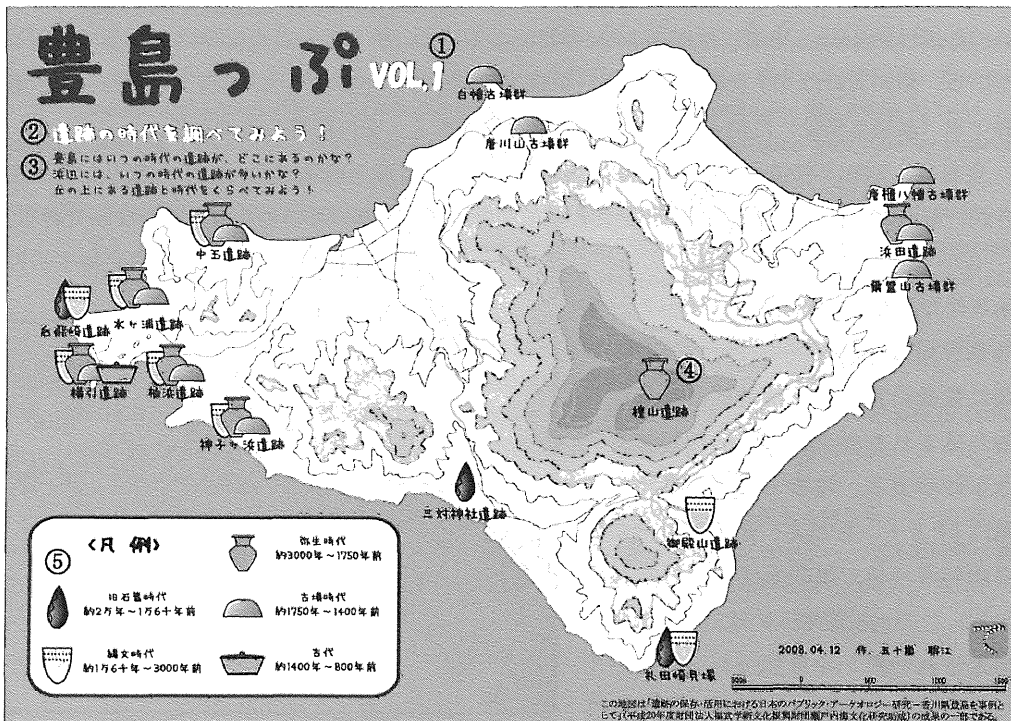
しかし、その島の名を全国に広めたのは、島の豊かさとは裏腹に、有害産業廃棄物不法投棄事件である「豊島事件」であった。豊島事件は、1978年から1990年の13年間に豊島の西端水ヶ浦地区に島外から持ち込まれた廃棄物が不法に投棄された事件である。投棄された廃棄物の総量は67万トンを超え、2000年6月の公害調停成立後、現在も処分が行われている。この水ヶ浦地区には、国立公園に指定された豊かな自然があっただけでなく、過去の調査から少なくとも3箇所の遺跡があったことがわかっている。



第1図 豊島の位置



第2図 豊島の遺跡分布



第3図 「豊島っぽ」(①～⑤は文中を参照)

Ⅱ. 豊島における考古学の現状

豊島には現在、先史・古代の遺跡が18ヶ所確認されている（第2図）。これらの遺跡は、戦前より踏査が行われており²⁾、戦後まもなく1949年、1952年には発掘調査が実施された（松浦1953、鎌木1954）。その後も断続的に踏査は続けられていたが、豊島における組織的な考古学調査は1996年の徳島文理大学の調査（石野ほか1998）をまたなければならない。1960年代半ばには、考古学に関心があった島民によって、土器片の採取が行われており、その資料は現在、島外の博物館・資料館で保管されている³⁾。

1955年の合併により豊島村は消滅している。このことが、戦後すぐに盛んな考古学調査が行われた要因のひとつと考えられる。現在、豊島は小豆島の西北部とともに土庄町を構成しており、自治体の中心地は小豆島にある。合併当時、豊島村役場職員であった鱸栄一氏が調査に尽力されている。鱸氏は、合併で消滅する豊島村の歴史を残すために、合併前年の1954年に『豊島村誌』⁴⁾を執筆しており、その執筆にあたり豊島の歴史を調査している。遺跡の調査もその一環であり、合併を機に豊島での考古学調査は減少している。

合併によって、豊島の文化財行政は小豆島の土庄町が担うようになった。それゆえ、豊島の文化財である考古資料の多くは島外の博物館・資料館に相次いで寄贈された。島内に資料を保管する適切な場所がない豊島にとって、島外の博物館における資料の保管は、次善の策といえようが、現実的には、そのために島内においてこれらの資料を活用することが難しい状況が生じている。また、豊島中学校の図書館には、豊島で採取された資料が展示してあるが、資料に関する詳細な説明や資料採取の経緯を知っている人もいないため、残念ながら、資料の活用が十分にできていない現状である。

Ⅲ. パブリック・アーケオロジーの実践

1. 「豊島 島の学校」⁵⁾

島の名のように「豊かな島」の再生をめざす取り組みのひとつとして、2002年から豊島で「豊島 島の学校（以下「島の学校」）」が、開催されている。

この「島の学校」は、参加者が2泊3日の日程で島に滞在し、島民との交流を通じて「豊島事件」について学び、豊島の再生にむけて何が必要なのかを考える場である。2008年の第6回「島の学校」は8月22日から24日に開催され、28人の参加者があった。

「島の学校」の2日目に、参加者と島民が豊島の再生に向けての方策を考える2時間半のワークショップの場が設けられており、2007年の第5回より考古学チームが「歴史クラス」



第4図 「島の学校」でのワークショップの様子

を担当している。第5回は、豊島における先史時代の遺跡概要をスライド等で解説し、豊島の遺跡分布図（第2図）を用いて豊島にも遺跡があるということを紹介するとともに、豊島の歴史を示す遺跡を保存する必要性について説明を行った（遠部ほか 2008）（第1表）。第6回は、個別の遺跡を掘り下げて、より具体的に豊島の遺跡、そして歴史について報告を行った。ここでは、実際に豊島の遺跡を調査した経験者⁶⁾が授業を担当し、参加者がより臨場感を持って授業をきいてもらえるように心がけた。また、「豊島事件」によって負のイメージをもつ水ヶ浦地区にもかかつて遺跡が存在していたという事実を踏まえ、これからの豊島の再生を考える上で、持続可能な考古学的活動が、事件を防ぐ一端を担う可能性を提示した。

さらに、「国や地方公共団体による指定などの措置はとられていないが、地域の住民にとって大切な文化財は数多く存在すると考えられ、そのような文化財を幅広くとらえ、その周辺環境も併せて保存・活用していくことが重要である（文化庁 文化審議会 文化財分科会 企画調査会 2007）。」という考えに基づき、島民が文化財保護に関わるための遺跡の定点観測の必要性や、考古資料として十分な情報を引き出せるような採取遺物の保存方法などを示した⁷⁾。

第1表 第6回「豊島 島の学校」歴史クラス講義内容

講義内容	講師	所属
産業廃棄物不法投棄現場の考古学－水ヶ浦のモデルケース－	遠部慎	北海道大学埋蔵文化財調査室
豊島の古墳－立地の意味とその解釈－	福田彰宏	徳島文理大学修士課程修了
犬島貝塚の発見の経緯	小野伸	犬島再発見の会
神子ヶ浜遺跡とその時代－浜辺に進出した縄文人－	松本安紀彦	高知県立埋蔵文化財センター
豊島石造物の歴史的展開－豊島石造物調査の途中経過報告－	松田朝由	大川広域行政組合
産廃の島の遺跡を守ろう！！	五十嵐聡江	葛飾区郷土と天文の博物館

2. 「豊島っぷ」(第3図)

「豊島っぷ」とは、一言であらわすことができない豊島が持つ島の様々な要素を表現するための地図である。島を多方向から眺めるためにテーマを設定し、テーマに沿った島の情報を提供するためのコンテンツである。テーマによってそれまでバラバラだった情報が有機的に結びつき、新たな島の価値を発見することを目的としている。そのため、今回の「豊島っぷ」はその第一弾ということで vol. 1 とし、将来的には豊島に関わった人々が様々なテーマで自分なりの「豊島っぷ」を作成し、豊島の価値を発見できるように活用していくことをめざしている(①)。

vol. 1 は、まず、豊島の遺跡が持つ空間と時間の情報を伝えるために「遺跡の時代を調べてみよう！」をテーマとして作成した(②)。作成するにあたり心がけたことは、従来の遺跡地図と観光マップとの差別化を図ることであった。つまり、遺跡の位置・空間情報を伝えるだけでなく、遺跡の時代がわかること、また、テーマを設定することで地図にストーリー性を持たせたことである。また、散漫にならないようにテーマを限定し、着眼点を示した(③)。しかし、遺跡破壊を防ぐため、敢えて詳細な遺跡の空間位置に関する情報については記載をしなかった。

さらに、遺跡の位置と時代を目で認識してもらうため、地形図には 50 m ごとにグラデーションを付け (④)、時代を示すアイコンをイラストで作成し (⑤)、印刷はカラーで行った。地図の大きさは、なるべく大きく、しかし折らずに持ち歩けるように A4 サイズ (210mm×297mm) とし、可能な限り厚紙を用いた。

配布は、「豊島 島の学校」やアイランダー (次節を参照)、豊島 (楽) 会⁸⁾ など、島のイベント会場で行うとともに、島内外の人が自由に入手できるように島の玄関口である家浦フェリー乗り場で配布している。2008 年 4 月から現在までに、500 部以上配布した。

3. アイランダー

アイランダーは、離島振興を目的として年 1 回、国土交通省が主催する「離島」と「都市」との交流事業である。毎年、全国の離島の島民が池袋サンシャインシティに集まり、島ごとに「アイランダーブース」を設け、島の人たちとの直接対話を通して、島の最新情報などを聞くことができる。また島の伝統芸能などを堪能できる「アイランダーステージ」、島の特産品を購入できる「アイランダー・マーケット」などが設置される。2008 年度は 11 月 22 日・23 日に開催され、1 万人以上の来場があった。

行政が主導して参加する島が多い中、豊島が初参加した 2007 年には⁹⁾、豊島で環境や考古学の研究を行っている島外の研究者が有志で参加し、翌 2008 年は、豊島 (楽) 会が中心となって参加している。

豊島のブースでは、「豊島事件」を風化させないために事件の概要を記したパネルや、豊島の自然や文化を紹介するトランク¹⁰⁾を展示するとともに (第 6 図)、豊島や「豊島事件」に関する書籍、島の特産であるオリーブの加工品などを販売した。その中で、考古学チームは、豊島の遺跡概要を示すポスターを作成し、「豊島つぷ」の配布を行った。島の歴史を伝えるコーナーを設置したことは、アイランダーに参加している離島の中では初めての試みであった。



第 5 図 アイランダーでの豊島のブース



第 6 図 トランク・ミュージアムの様子

IV. 成果と課題

1. 「豊島 島の学校」

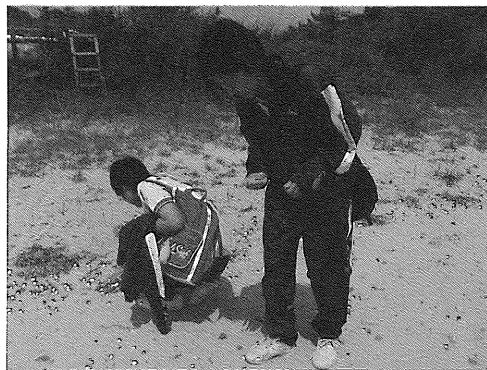
島内に行政機関や博物館の存在しない豊島では、「島の学校」が学校教育以外の場で唯一、歴史を知る重要な機会になりつつある。過去2回のワークショップを通じ、豊島の歴史を最新の研究をもとに島民に伝えることができたことは成果といえる。今回は、これらの成果を踏まえて、地元島民の理解と参加のもと、遺跡を実際に踏査する機会を持つ必要があるだろう。

2. 「豊島つぶ」

「豊島つぶ」をきっかけに豊島中学校では、総合学習の一環として、授業時間内に島の遺跡を調べることが行われたという。遺跡を調べることとなったきっかけは、入手方法はわからないものの、豊島中学校の生徒の一人が豊島つぶを持っていたことによるようである。このように、島の中学生在が今回の取り組みの成果をきっかけに、島の歴史に興味をもったことは予想外の成果であった。

このような成果の背景には、A4サイズの厚紙で作成されたことにより、ごみとして捨てにくく、「豊島つぶ」が人づてに伝わる要因のひとつとなった可能性がある。

一方で、この「豊島つぶ」には、遺跡破壊を懸念して、具体的な遺跡の位置情報や写真を掲載していなかったため、島の中学生から、「正確な遺跡の場所がわからない」との意見があった。豊島の遺跡群は、三内丸山遺跡や吉野ヶ里遺跡のように整備されたもの、もしくはピラミッドやマチュピチュのように地表面に露出している大規模なものではなく、海岸に未整備の状態で分布しているために、「豊島つぶ」の情報だけでは遺跡の所在が分かりにくかったのでは



第7図 島の中学生による表採

はないかと考えられる。その背景には、およそ多くの日本人のように遺跡に対するイメージが明確ではなかったことにも起因すると考察している。実際には、生活の身近に遺跡があるという認識を高める必要があることを痛感した。今回は、遺跡破壊を恐れて故意に遺跡の正確な位置を示さなかったが、今後は「豊島つぶ」を改訂するにあたり、両方をふまえた更なる地図の検討が求められる。

3. アイランダー

当初、物産展化しているアイランダーにおいては、来訪者たちに、島の歴史に興味を示してもらえるか不安ではあった。しかし、始まってみると、多くの人々がブースに足を止め、ポスター内容に関する質問があるなど関心の高さを示した。2007年度は、豊島単独として出展したが、2008年度は、豊島の北方約10kmにある岡山県岡山市犬島と共同で参加した。犬島のブ

ースでは、考古学に触れてもらうひとつとして、海に落ちた貝塚の層から貝を取り出すクリーニング体験を設けたところ、老若男女から好評であった。

さらに、アイランダーへの犬島との共同参加は、改めて島というものが、ひとつの独立した空間として成立するものではないということを実感する場になった。この活動を通して、豊島以外の島々との繋がりを考古学という手段を用いて、再確認する必要性を感じた。



第8図 貝を取り出すクリーニング体験

島外の人々に対し、遠隔地であり情報が少ない豊島の遺跡に関する関心や認知度を高めるためには、アイランダーのような考古学以外のイベントに参加することも、ひとつの手段とすることはできないだろうか。

V. 「共に」をめざして

豊島では、自分の住んでいる地域にも遺跡があるという認識が高まり、いくつもある遺跡が身近なものとして感じられるようになってきているといえる。「豊島っぶ」を手がかりに、島の中学生在が、自主的に郷土学習を始めたことは、パブリック・アーケオロジーのもつ「市民と共に」へ向けた第一歩としてとらえることが可能ではないだろうか。遺跡や考古学的な重要性を地域のなかで広く普及し活用していくためには、さらに時間はかかるかもしれないが、いずれ、島の未来を考えるための情報の一つとして、地域の歴史を考える土壌を島民と共につくっていきたいと願っている。

しかし、豊島には、自治体の中心地がないことによって、かつて調査が行われた遺跡から出土した遺物等が島外へ流出している事実はわからない。現状では、流出した遺物がどこに保管されているかも明確ではない。そのため、今後は島外の資料の収蔵先や資料目録の作成、および報告も教育普及に必要であると考えている。

本稿をなすにあたり、日頃からご教示をいただいている川西宏幸先生および豊島学（楽）会、豊島島の学校実行委員会、豊島中学校のみなさんに感謝いたします。また以下の方々にも多くのご教示、ご協力を賜りました。末筆ながら記して御礼申し上げます。（敬称略・五十音順）

市村康，猪野沙弥香，遠部慎，長谷川敦章，前田修

なお、本稿は平成20年度福武学術文化振興財団瀬戸内海文化研究・活動支援助成の成果によるものである。

（葛飾区郷土と天文の博物館・筑波大学大学院人文社会科学研究所）

註

- 1) 2006 年度から活動をしている。従来のように固定された研究者中心の組織ではなく、状況に応じ流動的にメンバー構成は異なる。大学等の組織にこだわることではなく、豊島に興味・関心をもつ人々が積極的に参加している。今後、広く参加者を募る形態を続けるのであるならば、組織化も必要になってくるだろう。
- 2) 『香川県文化財調査報告 2』によると、戦前の調査実態がうかがえる。
- 3) 調査途上で未発表のものが多く、これからさらなる調査が必要と考えている。
- 4) 現存する『豊島村誌』は、B5 版の大学ノート 5 冊に書かれたものであり、書籍化され一般に配布されていない。しかし、戦後の開発等で失われてしまった遺跡の情報が記載されているなど、豊島の歴史を知る上で欠くことのできない文献である。そのため、現在、『豊島村誌』の保存に向け、文献のデジタル化を行っている。いずれは、正式な書籍として島に残していきたいと考えている。
- 5) 「豊島 島の学校」とは、「豊島事件」に関わった弁護士等を中心にした実行委員会によって運営されている。
<http://www.teshima.ne.jp/>
- 6) ここでは、実際に調査に参加した人であれば、誰でもその遺跡について広く議論することが可能であるという立場から、担当者、研究者だけでなく、作業に従事した全ての人を含めて経験者とした。
- 7) 例えば、採取日や採取場所など、採取遺物に添付するラベルの記載事項や、遺跡の定点観測をするためのカルテの作り方を説明した。
- 8) 豊島（楽）会は、「香川県豊島有害産業廃棄物不法投棄事件に関連した事項や豊島島民の暮らしに関する事項を学際的に研究し、豊島住民と共に学び、楽しみ、豊島の特性を活かした島づくりに寄与する」（豊島（楽）会規約第 3 条）ことを目的とし、2006 年 7 月 30 日の島の学校において設立された。年 1 回、豊島で島民を交えた学会を開催している。
- 9) 豊島住民は、2007 年までアイランダー事業の存在を知らなかった。このようなところでも豊島に行政機関がない弊害があらわれているといえよう。
- 10) スーツケースの中に小さな博物館展示を表現したものである。簡単にどこへでも持ち運べるという利点がある。

引用文献

- 石野博信・福田彰浩・三木素美子 1998 『小豆島の考古学』徳島文理大学文学部コミュニケーション学科・遠部 慎・五十嵐聡江 2008 「豊島から見る島嶼部の考古学―「島の学校」への参加を通して」『考古学研究』第 55 巻 第 2 号 24-28 頁。
- 鎌木義昌 1954 「香川県小豆郡神子浜遺跡」『日本考古学年報 2（昭和 24 年度）』日本考古学協会 69 頁。
- 佐藤涼子編 2005 『文化遺産の世界』17 号 国際航業株式会社 文化事業部。
- 文化庁 文化審議会 文化財分科会 企画調査会 2007 『文化審議会文化財分科会企画調査報告書』
- 松浦正一 1953 「小豆郡豊島村横引遺跡」『香川県文化財調査報告 2』香川県教育委員会 9-18 頁。
- 松田 陽 2005 「パブリック考古学の遺跡への導入―英国の事例考察および日本におけるその適用の可能性」『遺跡学研究』第 2 号 90-101 頁。
- 真邊 彩・大屋匡史・河野裕次・榊原えりこ 2008 「双方向性の遺跡説明会を目指して―鹿児島大学構内遺跡説明会における取り組み―」『考古学研究』第 55 巻 第 2 号 20-23 頁。